

住総研だより 第10号 (2012年夏号)



8月3日に開催された絵本展ワークショップの様子(6～7頁参照)

目次：

最近の動き	1
イベントだより	2
・第34回住総研シンポジウム	
・キックオフミーティング	
・「住まい・まちの絵本展」	
・主体性のある住まいづくり	
実態調査委員会	
・集合住宅コミュニティ活性化	
委員会	
シンポジウム開催案内	

最近の動き

●平成23年度の事業報告

平成24(2012)年5月18日の理事会および6月4日の評議員会で平成24年度の研究助成、平成23年度の事業報告等が議決され、同決議に基づく公益目的支出計画実施報告書を内閣府へ提出した。

●キックオフミーティング開催(4～5頁参照)

平成24年度研究助成19件の決定者を対象に、6月22日にキックオフミーティングが開催され、助成手続き等に関するガイダンスが行われた。同時に住総研研究選奨の表彰式および研究発表が開催され、これから研究を始める研究者へ好事例として聴講いただいた。その後、集まった研究者や財団役員、研究運営委員との交流会が行われ、参加した研究者間の研究ネットワーク拡大に貢献した。

●住総研住まい読本シリーズ第1弾の『第三の住まい』を6月末出版(11頁参照)

住総研出版物シリーズ化の第一弾として、『第三の住まい』(小谷部育子著・住総研コレクティブハウジング研究委員会編)が本年6月末に出版された。

第二弾は、高齢期の住まい方を題材にした「住みつなぎのスズメ」(仮)高齢期居住委員会編が今秋出版予定。

●第34回住総研シンポジウム開催(2～3頁参照)

本年度の重点テーマ「リアルな地域のあり方を住まいとの関係で描く」の第1回シンポジウム『生活空間としての地域に関わるビジョンを語る』を7月13日(金)建築会館ホールで、地域に期待される役割と住まいとの関係についての講演およびパネルディスカッションを行った。参加者は、185名でその参加費121,000円は、東日本大震災被災地の岩手県上閉伊郡大槌町へ復興寄付金(図書購入に対する寄付金)として寄付した。(ご協力いただいた皆様方へ御礼申し上げます。)

今後は、第2回を11月30日(金)、第3回を平成25(2013)年3月18日(月)に予定。

●絵本展開催(6～7頁参照)

住教育や図書室の利用向上の一環として、7月31日(火)から8月9日(木)までの10日間にわたって絵本展を開催した。「絵本の読み聞かせ会」(参加者17名)と「紙工作飛出すカード」(参加者33名)のワークショップを実施した。期間中の来場者数は120名であった。

第34回住総研シンポジウム概要

テーマ:リアルな地域のあり方を住まいとの関係で描く(1)生活空間としての地域に関わるビジョンを語る ※東日本大震災復興支援事業



松村秀一氏



清水義次氏



山本理顕氏



2012年7月13日(金) 13:30~17:00 建築会館ホール

司会:

松村秀一(東京大学大学院教授)

講師:

清水義次(株式会社アフタヌーンソサエティ代表取締役)

山本理顕(株式会社山本理顕設計工場)

岡部明子(千葉大学大学院准教授)

藤澤好一(一般社団法人工務店サポートセンターセンター長)

当財団の本年度の重点テーマである「リアルな地域のあり方を住まいとの関係で描く」に際して、今テーマの提唱者である松村秀一東京大学大学院教授を中心に、本年度に合計3回のシンポジウムを企画している。その第1回目となるシンポジウムが2012年7月13日に開催された。

シンポジウムの主旨:地域のビジョンを豊かに描く

はじめに松村秀一氏から、今日の縮小社会・ストック社会におけるこれからの住まいを考えると、「住まう」ことの舞台と

もいふべき「地域」の必要性が述べられた。

労働や生産、祭りや縁日など住宅地の地元の行事、日々の消費などが密接に結びついていた住まいと地域の関係は、近代化に伴う急激な都市化によって断ち切れ、気が付けば住まいの周りには何もない、地域の中に知る人も少ないという状況が、ますます助長されているように見える。

そこで、こうした閉塞的な住まいと地域の様相に危機感を抱き、『住まいの延長上にリアルな地域を描き出すことで、住まいと地域関係を捉え直し、建築関係者ある

いは住まい手は今後どう対処すべきなのか、身近に感じるかたちで構想し、行動へのキッカケを掴む』、これが今回のシンポジウム開催の主旨で、各パネリストの実践的報告のなかから、地域のビジョンを紡ぎ出していくものとなった。

(1) 清水義次「エリアマネジメント＝家守の時代が来ている」

一人目の実践者は清水義次氏。「都心再生と過疎地再生を同次的に捉える」ことを原点に展開する、現代版家守（ヤモリ）の活動が紹介された。地域で遊休化している不動産資源に着目して活用を推進するというこの活動は、公的補助金に一切頼らない、まさに民間による民間のための地域活性化プロジェクトである。東京都内の問屋街再生・廃校活用から、北九州や岩手県など地方の町有地再生まで、「地区ごとに処方箋が異なるだけ」と同次元の問題として捉えた、エリアに価値を見いだす実践であった。

(2) 山本理顕「1住宅＝1家族」から「地域社会圏」へ

山本理顕氏からは、地域の鮮烈な空間イメージとともに、空間に連動した居住システムが提案された。これは、戦後日本の画一的な住宅供給のあり方、「1住宅＝1家族」というシステムが大きく破綻しているという背景から、山本氏があらたに唱える「地域社会圏主義」というもの。500人程度をひとつの単位と想定し、「寝間」と「見世」を中心に構成されたイエ（2.6×2.4×2.4m）が、多様に重なり合って連携していくという住空間モデルである。この集合が住まいのエネルギー供給やインフラ、地域内経済にまで連携しており、これから求められる介護や看護の関わりまでが、明解に示された。

(3) 岡部明子「地域の小さく回る経済の可能性」

岡部氏からは、地域で小さく回る経済の仕組みを探るための実践が紹介された。自らが教鞭をとる千葉大の学生とともに、千葉・館山にある茅葺き民家を再生・活用の事例である。資金もない、茅もない、職人もいない状況下で、地道にオンボロ家屋の掃除を続け、毎月の集会参加、夏祭りや蔵開きなど地域活動に参加を続けたという。その活動をベースに編み出された岡部流「地域で小さく回る経済の秘策」が伝授された。それは「そこに“住む”」こと。そこに住んで仕事をし、生活をしてこそ、地域の暮らし全体が向上していくというもので、肩肘張って頭で考えずに、まずはその地域に身を預けることという、まさに足元を見直すような地域論であった。



岡部明子氏



藤澤好一氏

(4) 藤澤好一「地域の生産者の将来像」

最後の藤澤氏は、これから地域の工務店がもつ可能性や将来像について、一般社団法人工務店サポートセンターでの動きを中心に紹介された。工務店は非常に小さな業態でありながら、古くから市場の要望に応え、業態を変化させながら発展してきた活動力がある。今後、地域間で連携することで、さらなる地域サポートセンターとしての可能性が増幅するであろうと、工務店の全国組織を目指す。多様性を尊重しながら、業界共通のルールをつくり、情報や人材をオープン化するなど、住まいに関わる生産者・造り手が連携することで、地域に暮らす住まい手の豊かな住空間にもつながるという展望が垣間見えた。

（文責：（有）建築思潮研究所 帳卷子）

キックオフミーティング

「2012年度研究助成キックオフミーティング」が6月22日に当財団で開催された。

この会は、2012年度の研究助成の採択者と2011年度の住総研研究選奨受賞者を一堂に会し、助成研究への激励の意を込め、全国から出席された「住」関係分野の研究者間での親睦を深めることを目的としている。

はじめに、当財団理事長野村哲也より開会の挨拶に続き、研究運営委員会の松村委員長より本年度研究助成19件の審査経過報告がなされ、「計画・歴史から構造・環境系まで幅広く応募がなされ、また建築・住居学以外の分野からの提案も複数あった。応募者の所属機関も全国各地に分布し、年齢構成も20代の若手から70代のベテランまでの広がりを見せており、これは住総研が住に関わる研究助成機関として広く認知されていることの表れであり、たいへん喜ばしいことである。」と述べられた。一方、「テーマ設定の意味を十分に汲み取った研究計画が少なく、結果として重点テーマに関連した研究の採択数が少なかったのは残念であった。」とする旨を付け加えた。

続いて2012年度の研究助成に採択された主査の紹介が行われ、今後の論文提出までの事務手続き等の説明が事務局からなされ

た。

後半には、松村委員長より2011年度「住総研 研究選奨」の趣旨説明後、表彰が行われた。選奨論文は次の2件である。

・『能登半島地震・被災集落における住宅復興の生活文化論的検証：拡大家族に着目した居住と地域の持続性の論理』

主査 山崎 寿一

(神戸大学大学院工学研究科 教授)

・『住宅と福祉の「すき間」を埋める新たな居住支援の検討：高齢期の安心居住に向けた住宅管理サービスの事業モデル』

主査 三浦 研

(大阪市立大学大学院生活科学研究科 准教授)

受賞者からは受賞論文に基づく講演が行われ、研究方法や成果についての反省点などが具体的に話され、本年度助成研究者にとって、大きな励ましとなったようである。

講演終了後、中庭で交流会が催された。「住まい」に関する研究者が一堂に集まる機会が少ない中、財団の深尾理事、星理事、若林理事、研究運営委員の先生方とも交流を深め、研究者にとって貴重な機会となった。



研究運営委員長：松村秀一氏



交流会の様子

2012年度 住総研 研究助成採択者（19件）

助成No.	主査氏名	所属	主題	テーマ
1	1201	竹林 芳久 東北学院大学工学部環境 建設工学科 教授	地方都市における低エネルギー住生活実現のための調査研究	自由
2	1202	西野 達也 金沢大学理工研究域環境 デザイン学系 助教	一中学校区を基本とする日常生活圏域設定の妥当性検討	自由
3	1203	大場 修 京都府立大学大学院 生 命環境科学研究科 教授	佐渡島の町家に関する史的研究	自由
4	1204	葛西 リサ 大阪市立大学都市研究プ ラザ GCOE研究員	地域生活者としてのDV被害者の孤立と支援方策に関する研究	自由
5	1205	亀屋 恵三子 神戸市立工業高等専門学 校 講師	療養中から死別後の住まいの再編に関する事例的研究	自由
6	1206	田中 傑 東京理科大学総合研究機 構 火災科学研究セン ター PD研究員	スコーピエ地震時のプレハブ仮設住宅における居住履歴	自由
7	1207	宮崎 洋司 宇都宮共和大学 教授	日本の一般市街地の住みよさ向上のための計画論に関する研究	重点
8	1208	堀 裕典 大阪市立大学都市研究プ ラザ 特任講師	カナダ諸都市の一般市街地における裁量的開発審査に関する研究	重点
9	1209	小泉 和子 小泉和子生活史研究所・ 代表	旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の室内意匠及び家具調度品の研究	自由
10	1210	松川 寿也 長岡技術科学大学環境・ 建設系 助教	開発許可制度の裁量的制限に関する基礎的研究	自由
11	1211	山本 理奈 東京大学・日本学術振興 会特別研究員（RPD）	都市居住のイメージと住宅広告の役割に関する比較社会学的研究	自由
12	1212	前田 昌弘 京都大学大学院工学研究 科 研究員	津波被災者への居住支援と“信頼構築”の関係に関する研究	自由
13	1213	佐藤 由美 大阪市立大学都市研究プ ラザ 特任講師	「一般市街地」における住生活の豊かさ指標の提案	重点
14	1214	笹木 篤 (株)建築都市設計イン タースタディオ 代表取 締役	現代に残る茅場の伝統的管理運営形態と茅葺民家についての研究	自由
15	1215	碓田 智子 大阪教育大学教育学部教 養学科 教授	住生活を語る歴史の証人である重文民家のマネジメント	自由
16	1216	権藤 智之 芝浦工業大学・日本学術 振興会特別研究員（PD）	近年の韓国における木造住宅生産に関する研究	自由
17	1217	松本 暢子 大妻女子大学社会情報学 部 教授	東京の既成市街地における宅地・住宅の更新の評価に関する研究	重点
18	1218	岡崎 泰男 秋田県立大学木材高度加 工研究所 准教授	木造住宅における打診による劣化診断判定の科学的根拠の解明	自由
19	1219	加藤 雅久 居住技術研究所 主宰	住宅建材の品質確保における建材試験と標準化の変遷	自由

「住まい・まちの絵本展」開催

地域の方々への住教育および住総研図書室を知っていただくため、「住まい・まちの絵本展」を昨年に続いて開催した。7月31日から8月9日までの開催期間中にお話会とワークショップを各1回行った。

今年にはまちに見立てたパネル上に家やビル、人や動物などの切り絵を子どもたちが好きな場所に貼って1つのまちを作り上げるといったコーナーも設けた（写真2）。



写真1 建物外のディスプレイ



写真2 まちづくりパネル

◎絵本展 来場者数：120名（延べ人数）

住総研図書室で所蔵の住まい・まちに関する絵本を中心に約200冊を分かりやすく以下の分類に分けて展示した。

- (1) 家の内部
- (2) 家族
- (3) 高齢者
- (4) 地域との関わり（コミュニティ）

- (5) まちの様子
- (6) 世界の住まい・暮らし
- (7) 昔の住まい・暮らし
- (8) 家の建て方やリフォーム
- (9) 環境問題
- (10) 災害

来場者は未就学児とその母親を中心に、高齢者の来場もあり、好評であった。



写真3 絵本展展示の様子

◎お話会 8月1日開催 参加者数：17人

地域で読み聞かせのボランティアを行っている石井一美氏が講師となって開催された。

アンコールを含めて18冊、約2時間に渡って行われた。中でも『100かいだてのいえ』『ちか100かいだてのいえ』（2冊とも岩井俊雄著、偕成社）、『ぼくのいえにけがはえて』（川北亮司文／石井聖岳絵、くもん出版）は子どもたちに好評であった。

大人も絵本の世界に夢中になり、盛況裡の内に終了した。



写真4 お話会の様子

◎ワークショップ

【飛出すカード作り】8月3日開催 参加者数：33人

2つに折った画用紙に切り込みを入れて折り、折返し部分に紙などを貼りつけたりして、カードを開くと仕掛けが飛び出して立体的になるカード作り。完成後は各々の作品を全員の前で発表した。参加者の約6割が小学生で、自由研究を兼ねて参加した

と考えられる。

完成したカードはそれぞれ個性が表れていた。まちを表現した作品や、家の中をテーマにした作品、家族をモチーフにした作品、中には、オリンピック開催中ということもあり、スポーツを題材にした作品もあった。昨年に続き2度目の開催であったが、今年も大変盛況であった。

(文責：風間)



写真5 ワークショップ（飛出すカード）の様子



写真6 飛出すカード作品

今回の絵本展ワークショップ・お話し会開催にあたり、町田万里子氏（元当財団住教育フォーラム委員会委員）、石井一美氏、和久井直美氏（小径の会）、西川美枝子氏（同会代表）にご協力いただきました。御礼申し上げます。

◎お話し会で取り上げた主な絵本（すべて当図書室で所蔵しております）

タイトル	作者等	出版者
あなたのいえわたしのいえ	加古里子ぶん・え	福音館書店
14ひきのひっこし	いわむらかずおさく	童心社
14ひきのあさごはん	いわむらかずおさく	童心社
くすのきだんちは10かいだて	武鹿悦子作，末崎茂樹絵	ひかりのくに
ちいさいおうち	バージニア・リー・バートン著	岩波書店
バーバパパのいえさがし	アネット・チゾン／タラス・テイラーさく	講談社
バーバパパのはこぶね	アネット・チゾン／タラス・テイラーさく	講談社
おかえし	村山佳子作，織茂恭子え	福音館書店
おおきなきがほしい	佐藤さとり作，村上勉絵	偕成社
おとなりさん	きしらまゆこ作，高島純絵	BL出版

主体性のある住まいづくり実態調査委員会

「主体性のある住まいづくり実態調査委員会」の設立について

住総研では、活動と成果の集約化と見える化を図るために、平成22年度よりその年度に重点的に取り組む重点テーマを定めることにしている。平成26年度の重点テーマとして『作られたものから作るものへー主体形成としての住宅ー』を定めたことに関連して、自主的な調査研究及び資料事業の一環として立ち上げたのが、『主体性のある住まいづくり実態調査委員会』である。

委員会は、木下勇（千葉大学教授・まちづくり）を委員長に、松村秀一（東京大学教授・建築構工法）、内田青蔵（神奈川大学教授・建築史）、村田真（日経アーキテクチュア編集委員）、宮前眞理子（NPOコレクティブハウジング社副代表理事）が委員に、財団側から岡本宏（専務理事）、伊藤敏明（研究推進部参与）、岡崎愛子（同研究員）が事務局として参加している。

平成26年度の重点テーマは、重点テーマ主旨説明に記されているように、住まいの住み手や作り手が巨大な市場経済に飲み込まれた現代社会では、「住まいは作るもの」としての対象から、市場に用意されたものの中から選ぶだけの「消極的な選択」でしかない。そこには自らが生きているリアリティを感じる主体を發揮する機会も場もない、という設定である。それでは、封建社会から急激な近代化を遂げその後敗戦、そしてまた急激な高度成長を経てバブル経済の崩壊を辿った日本に、そうした主体性が發揮されていたのか、過去への疑問と現代への懐疑が混在する中で、主体が形成される明日の住まいを実態調査から浮かび上がらせる構想である。全員参加のもとに平成24年5月29日開催された第一回委員会では、まずは西田幾多郎の難解な哲学的な用語「作られたものから作るものへ」を脇に置き、「主体」が想起させる現代的な

意味、また想像される課題のありかについて、多彩な意見交換がされ、この様子は大変興味深いので小冊子にまとめて、いずれ機会を見て皆様には笑覧いただきたいと思っている。

「実態調査」の委員会の名称から見て、「委員会は客体としての主体を脇で眺めるだけに過ぎない」怖れを払拭すべく、第二回委員会では、「私の主体」として寄稿いただきまとめたのが「第二回委員会のディスカッションペーパー」である。あくまで自らの主体には入り込まずに、あくまで客観的に振る舞う委員の実態も浮き彫りになりそうな怖い委員会でもある。ところで「主体とは誰を指すのか」、会話の中に無意識に混じり込む言葉の意味一つにも深い意味がありそうで、この先この委員会の終着点、2年先まで頭が回転し続けているかどうか。

（文責：岡本(当財団専務理事)）

主体性のある住まいづくり

議論を収録したテープ起こしを基に
岡本により修文

平成24年
主体性のある住まいづくり
実態調査委員会編
一般財団法人 住総研

私の主体性

第2回委員会ディスカッションペーパーとして
委員からの寄稿を編集

平成24年
主体性のある住まいづくり
実態調査委員会編
一般財団法人 住総研

平成26（2014）年度重点テーマ
「作られたものから作るものへ」－主体形成としての住宅

高度消費社会の中で、各地の歴史や文化的な背景のもとで造られてきた住まいは、住宅供給の産業化とともに、現代的なテクノロジーを武器に住宅産業に参入したハウスメーカーやディベロッパー等で巨大化した市場経済の仕組みに呑みこまれようとしている。こうした状況のなかで、住まいはますます商品化の傾向を強め、住まいの「作るもの」^{注1}という住まい手の主体性や、伝統的住文化、生産の仕組みを支えていた職人の技術や地域文化もが失われるのではないかと危惧される。

技術をはじめ様々な進歩は否定されるものでもなく、また過去に戻れということでもないが、このテーマの背景は、今を生きる我々が、未来を見つめる時に、もういちど住むという根源（それは “「場所」に存在を関係づける、生きる主体的行為”）に立ち返り、主体性を発揮する道を見つめ直すべきではないかとの疑問にある。

ここでは伝統技術や文化の継承だけではなく、人口減少や少子高齢化及びストックの活用などの社会的課題への対応や、国際化、環境問題、エネルギー問題など、これからの時代において、かかる課題の解決も主体の問題として考慮する必要があるだろう。過去から未来へ持続可能性、住む・作る主体が形成される住宅（住宅地）のあり方を、研究・実践面での多様な角度から提起されることを期待したい。

研究運営会委員・木下勇（千葉大学教授）

注1 「作られたものから作るものへ」は西田幾多郎の『絶対矛盾的自己同一』（1939年初版、岩波書店1989）よりの引用である。実に主体的でない委員の実態をも浮き彫りになりそうな情勢である。

集合住宅コミュニティ活性化研究会

-市ヶ谷加賀町アパートを対象としたコミュニティ活性化研究について-

近年の家族機能の弱体化にともない、これまでのような公的サービスに依存した福祉政策や行政主導のまちづくりには抜本的な見直しが必要となっている。このような社会的背景の中、住民による互助型の地域コミュニティが注目されている。公的サービスや自助努力だけに頼るのではなく、日常生活の中で住民同士で助け合い、安心して豊かな暮らしを実現させるといふものだ。また、昨年発生した東日本大震災においても、地域コミュニティが防災において大きな役割を担ったことが報告されている。どのような状況でも対応できるようなコミュニティ力を日頃から高めることが必要である。そこで、賃貸集合住宅コミュニティ活性化研究会では、住総研が所有する「市ヶ谷加賀町アパート」を対象にハードソフトの両面から賃貸集合住宅内および周辺地域とのコミュニティ活性化の方法を検証し、実践することで、賃貸集合住宅におけるコミュニティの在り方を探ることを目的としている。市ヶ谷加賀町アパートの住戸数は70戸、うち69戸を賃貸住宅としている（1室は管理員室）。2011年時点の居住者数は173名、平均年齢は39.5歳であり、各世代の居住者が暮らしている。また、家族型は夫婦と子供からなる世帯が43%と最も多い。2010年からは空室となった住戸を対象にシェア住戸に改修し、現在6住戸18室のシェア住戸がある。

2012年2月に居住者を対象としたアンケートを実施した。総合的には8割を超える居住者から「満足」との回答をいただいた。しかし、その要因は「交通の利便性」「周辺環境」といった立地に関わるものが多くを占めていた。市ヶ谷加賀町アパート内では、日常的な付き合いはほぼ見られず、挨拶をする程度にとどまっていた。しかしながら、非常時における「安否確認の声かけ」ができる程度の付き合いを望んでいる事も確認できた。

そして、いざというときに助け合える関係づくりを目指したコミュニティ活性化の第一歩として、「夏のガーデニング」を8月5日（日）に開催した。どのような人が住んでいるのかを知っていただく事、また市ヶ谷加賀町アパートに愛着を持っていただくために、各棟の玄関前に配置するためのプランターづくり、また、空いている土地を使って花壇づくりを行った。参加者は全部で12名と少人数ではあったが、夏の暑いときにもかかわらず、楽しくご参加いただいた。終了後は簡単なお菓子と飲み物で茶話会を行った。アンケートでも「また参加したい」「団地が明るくなった」「もっと参加者が増えてくれるといい」といったご意見をいただいた。

今後は防災にシフトした内容での住民参加の懇親会を予定しており、震災に備え、住民の相互認知度を高めようと計画している。

(文責：岡崎)



写真1 夏のガーデニングの様子



写真2 茶話会の様子

シンポジウム開催案内

第35回住総研シンポジウム概要

H24年度重点テーマ「リアルな地域のあり方を住まいとの関係で描く」連続シンポジウム(2)
生きがいをつくる高齢期の住まいと地域の関係

- 日 時 2012年11月30日(金) 13:30~17:00(受付13:00~)
- 会 場 建築会館ホール(東京都港区芝5-26-20)
地図:<http://www.aij.or.jp/jpn/guide/map.htm>
- 参加費 一般1000円・学生500円
参加費はすべて東日本大震災復興義援金として被災地にお送りいたします。
- 定員 150名
- 司会
松村秀一(東京大学大学院 教授)
- パネリスト/講演タイトル
 - 1)園田真理子氏(明治大学 教授)
「超高齢社会の地域のイメージ-高齢者と支える地域-」(仮)
 - 2)小泉秀樹氏(東京大学 准教授)
「地域のちからと高齢者くらしの復興-被災地での活動を通じて-」(仮)
 - 3)福田由美子氏(広島工業大学 教授)
「持続的居住支援システムとは-小学校存続活動を契機として-」(仮)
*住総研 研究助成「重点テーマ」研究(事例研究)より
 - 4)丹羽國子氏(一般財団法人まちの縁側クニハウス 代表理事)
「高齢者を支える地域の活動-まちの縁側クニハウスの事例紹介-」(仮)
- 申込み方法
WEBの申込みフォーム(<http://www.jusoken.or.jp/sympo-form.htm>)または、FAXにて氏名・所属・連絡先を明記の上、FAX(03-3484-5794)へお送りください。
詳細は、<http://www.jusoken.or.jp/symposium/jusoken.html>または、TEL(03-3484-5381)へお願いします。
締切は、11月27日(火)です。お早めにお申込ください。

新刊案内

「住総研レポートすまいろん2012」
(第2号)
発刊しました！



2011年度重点テーマ
縮小社会における
住まいのゆくえ

定価 ¥1,500
(税込・送料別)
※送料は1冊：¥80
2~3冊：¥160
B5判, 111頁
詳細は、以下のURLにて。
<http://www.jusoken.or.jp/publish/sumairon.html>

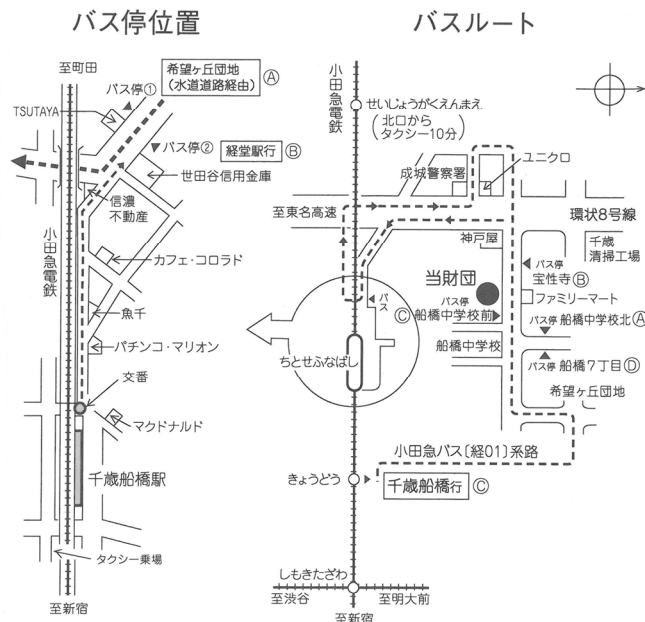
住総研住まい読本part1
第3の住まい コレクティブハウジングのすべて
発刊しました！



小谷部育子+住総研コレクティブハウジング研究委員会 編著
定価 ¥1,600+税
A5判, 166頁
発行：エクスマレッジ
ISBN978-4-7678-1424-7

お求めは
最寄りの書店にて。

住総研は「住生活の向上に資する」多様な研究と実践を推進しています



住総研への交通アクセス

◎小田急線「千歳船橋駅」下車

①バス乗場①より[歳25]希望ヶ丘団地(水道道路経由)行「船橋中学校北」下車

*所要時間7分

②バス乗場②より[経01]経堂行「宝性寺」下車*所要時間10分

◎小田急線「経堂駅」下車

③北口バス乗場②より[経01]千歳船橋駅行「船橋中学校前」下車*所要時間12分

◎京王線「八幡山駅」下車

④バス乗場(改札より約50m新宿寄)より[八01]希望ヶ丘団地循環「船橋七丁目」下車*所要時間10分

編集後記:昨年に続き「住まい・まちの絵本展」を開催しました。今年は、新たにお話を開催しましたが、子どもだけでなく、大人も夢中になりました。個人的には、子どもの頃、お話会に一度も参加したことが無いのですが、お話会の良さを今更ながら感じました。昨年の東日本大震災後、図書館や出版社、ボランティア団体等が被災地でお話会のボランティアを行ってきましたが、子どもだけでなく、中高年向けのお話会も開催されたそうです。『図書館情報学用語辞典』(丸善)によると、お話会の意義として「子どもに対して読書する素地を作る、本への興味を育てる」と記されていますが、大人にとっても和むのではないのでしょうか。(K)

住総研だより 第10号

発行日 平成24(2012)年8月31日

発行人 岡本 宏

発行所 一般財団法人住総研

〒156-0055 東京都世田谷区船橋4丁目29-8

電話 03(3484)5381

FAX 03(3484)5794

E-mail jusoken@kpe.biglobe.ne.jp

URL <http://www.jusoken.or.jp/>

住総研は「住まい」に関する研究助成事業を中心に、「住総研研究論文集」等を発刊、また住に関する専門図書室、シンポジウム・セミナーの公開開催など、社会のお役に立つような事業を進めています。

この「住総研だより」は、当財団の活動を研究者、市民の皆様により広くご理解いただくとともに、意見交流の場になることを願って配信しております。ご利用よろしくお願います。

「住総研だより」編集委員会